待降節黙想:12月18 日

黙想のテーマ:「聖ヨセフ、 地上の天国」「マリアと救い 主に寄り添う聖ヨセフの使 命」「マリアとイエスととも に、あらゆる困難を乗り越え る

聖ヨセフ、地上の天国

マリアと救い主に寄り添う聖ヨセフ の使命

マリアとイエスとともに、あらゆる 困難を乗り越える 「すでにこの世で、あなたは神と顔 を合わせていた」。これは、何世紀に もわたり歌い継がれてきた聖歌

「テ・ヨセフ」の一節であり、聖家族の長である聖ヨセフの使命に思いを巡らす際に、私たちが抱く気持ちを表しています団。私たちは、幼子イエスの愛に満ちた顔を通して、神の深い愛を見いだす方法を、聖母マリアの夫である聖ヨセフに、教えてもらいたいと願います。

しかし、地上での聖ヨセフの喜びには、苦悩が伴っていました。「二とが出た。」によっていることが明られていることが明られての要で、ですった」であることが明られてのでは、アまいたの事実を即座に受け上を、同はもでした。この重荷を、の手であるととせんでした。ことせんでした。この計画とみ旨のは、すべてが神の計画とみらいました。

就に向けて尽くされていました。聖 ヨセフは深く苦しみました。何が起 こっているのか理解できなかったも のの、マリアや神を疑うことは、決 してありませんでした。彼は「この ような偉大な聖性のそばで生きるこ とへの聖なる畏れに満たされていま した」ほ。驚きの中にいるヨセフ に、その役割を示し、思いとどまら せるために、天使が遣わされます。 「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリ アを迎え入れなさい。マリアの胎の 子は聖霊によって宿ったのである。 マリアは男の子を産む。その子をイ エスと名付けなさい。この子は自分 の民を罪から救うからである」(マ タイ1・20-21)。

この二重の知らせを受けたヨセフの 喜びは、容易に想像できます。救い 主がすでに地上におられ、自分が、 幼子と祝福された母を守る役割を担 うのだと、知らされたのです。マリ アを再び迎え入れる喜びは、ついに その時が来たことを知る大きな喜び と重なりました。ダビデの子孫に とって、この知らせは、何よりも さって、この知らせは、何よりいたものでした。救でした。かないたものでしたの中におられたで すでに彼らの中におられたで身にませる幸運を、夢にも思い描いようにもまでした。すべてがどのよったいするのかはまだ分からなかったもいました。

天使のお告げを受ける前に、「ヨセフは人生のよい計画に従おうとしましたが、神は別の計画を、すなわちより偉大な使命を彼に与えました。ヨセフはつねに神のみ声に耳を傾け、その秘められた望みを深く感じることができる人でした。彼は心の突深くで上から語られるメッセージに注意を傾ける人でした。(…)こ

うしてヨセフはますます自由で偉主の さいたのです。ヨセフリスを受け入れることで自らを受け入れることで自らを見た。ヨセフは、自分に属するの生活の中でも、ってあらめるは、中でもののをあらめな従順をもしているとは、対してもに、道を示しているとは、がしているとしている。

で、神が、この世に入る許可をヨセフに求めたかのようです。私たちもまた、神の愛の神秘を私たちのふれたちの心に迎え入れたりのです。イエスは強制を表しています。イエスは強所をよることなって、私たちの心に場所を開いてほしいと願いておられるのです。

神は聖ヨセフに、この世で最も尊い 二つの命を彼の家に迎えるよう、お 求めになりました。ヨセフは、この 与えられた賜物を喜んで受け入れま した。神の寛大さは無限であり、そ れを超えるものは存在しないこと を、神は私たちに示されました。ま た、神は私たちにも大小さまざまな 賜物を絶えず与え、心の中にイエス とその母のための場所を作ること を、望んでおられます。聖ホセマリ アは、聖なる家長である聖ヨゼフの 素朴さを思い浮かべるとき、喜びに

満たされていました。「聖ヨセフは本当に素晴らしい聖人です!無私無欲で謙虚であり、常に微笑みを湛え、穏やかで控えめな人です」[4]。

しかし、ヨセフは、多くの困難な時に直面しなければなりませんでした。特に、イエスが彼らに何も告げずに神殿に残られたあの日です。

「この福音のエピソードは、家族が もつもっとも本来の深い召命を示し ています。すなわち、家族に属する 者が、神を見いだし、神の計らいに よって定められた計画を見いだすこ とができるように、ともに歩むとい う召命です」

[5]。 三日後、両親がイ エスを見つけたとき、ヨセフは、マ リアもまたその出来事を理解できな かったことに気づき、ある意味慰め られました。マリアの傍らにいるこ とで、彼の迷いや不安はすべて解消 されました。マリアと一緒であれ ば、ヨセフは心の安らぎを感じるこ とができたのです。

この世でこれ以上何を求めることができるでしょうか。マリアのような存在から特別な愛情を受け、常にそばにいてもらうことは、まるで天国にいるかのようです。たとえ、家族とともにエジプトに逃れるために事場で日々働いていても、それは変わりで日々働いていても、それは変わり

ませんでした。マリアの微笑みが、 すべてを優しく包み込んでいたので す。

[1] 「Tu vivens, Superis par, frueris Deo, mira sorte beatior」。この聖歌は、聖ヨセフの祭日と労働者聖ヨ

セフの記念日に晩の祈りで歌われます。

[2] 聖トマス・アクィナス、 Commentary on the Sentences of Peter Lombard, Bk. 4, d. 30, q. 2, a. 2, ad 5。

[3] フランシスコ、「お告げの祈り」でのことば、2013年12月22日。

[4] アンドレス・バスケス・デ・プラダ『オプス・デイ創立者』参照 (Andres Vázquez de Prada, The Founder of Opus Dei, Vol. III, p. 526, note 170)。

[5] ベネディクト十六世、「お告げの祈り」でのことば、2006年12月31日。

[6] フランシスコ、説教、2019年12 月24日。 pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-taikou-18nichi/ (2025/12/13)